

## 第二話

## 描かれた江戸の下水

栗田 彰

私は、錦絵や戯作本の挿絵や古い写真を手掛かりに昔の下水道の様子を探っています。今日は、『江戸名所図会』を中心にして描かれている江戸の町の下水道の様子をお話してみたいと思います。

本題に入る前に江戸の町の概略を見ていただく方が良いのではないかと思います。江戸の町は、大きく分けて武家地、寺社地、それから町人の住んでいる町屋からなっていたそうです。それぞれの面積ですが、武家地が六割、寺社地が二割、町屋は残り二割だそうです。野村兼太郎という人が『享保年中江戸絵図』から推定したものです。

(抄紙一) この絵は、ちょうど現在の九段下辺りです。左側の絵の中央にあるのが武家屋敷です。その左側の坂が九段坂です。坂の下の所に丸印をつけてありますが、ここに下水が描かれています。この下水は、恐らく武家屋敷の脇からずっと坂を下ってきて、通りを横切つて廻橋の北側で日本橋川に流れ込んでいたのではないかと思われまゝ。下水はこ

のような形で描かれています。橋のようなものが描かれています。橋のようなものだつたかは後でまた見てみたいと思います。坂の下の方は町屋です。飯田町という町だと思ひます。

(図一) この図は沽券図です。一部を縮小したので分り難くなっています。上の方に橋のようものが描かれています。これは大通りに下水が横切つていた所に架けられた橋で、多分木か、場所によつてはその上に道路の土が被せられ、道路と変わらないようになつていたと思われまゝ。

真ん中辺り、少し大きい丸印を付けた所、ここには『此の下水幅三尺、公儀下水に御座候』と書かれています。これより少し上に『通旅籠町新道』と書いてありますが、これは後で作られた道で、元は町の境だつたのではないか。だいたい町と町の境にこのような大きな下水が流れていた、つまり町の境が下水で仕切られていたと思われれるからです。この新道にも下水の橋が架けられています。大きい丸印の右側にも通旅籠町というのがあります。この向き合つた一画が通旅籠町という町なのです。この縁に細い線で描かれています。これが雨落下水ではないか。これをたどつて行きますと橋のたもとから大下水に入っています。この図の原板は大きいものだと思ひます。

大雑把に言いますと、町屋では家の前に雨落下水がありまして、それから町と町の間には幅が三尺から六尺位の大下水があった。こんな事が言えると思えます。

（松松一一）この絵は、現在の万世橋の近く、筋違御門の所です。奥の方に武家屋敷があります。左の端の方に町屋がありますが、ここは須田町です。武家屋敷の丸印の部分を見て下さい。屋敷を囲むように長屋があり、その下に下水が描かれています。右の丸印では、通りを横切る所に下水の橋が架けられています。このように武家屋敷の周りにはお城の堀に近いような水路が描かれています。

（松松一二）この絵からお寺の周りでも武家地と同じように堀と言いますか、私は構え堀と言っているのかと思つていますが、そのような堀が作られていた事が分ります。このお寺は海禅寺と言います。現在の台東区松が谷二丁目辺りになります。この寺は、現存しているようです。絵の右側、清水寺と東光院の間の通りが今の合羽橋商店街に当たるところです。道路を横切る所には下水の橋が架けられている様子が分ります。お寺からの排水や門前町の排水は、この下水に流されていたものと考えられます。

さて、これまでは町屋、武家屋敷、寺社地の下水

の様子をごく大掴みに見てきたわけです。そこで少し細かく、もっと町に近付いて見てみたいと思えます。

（松松四四）この絵は、錦袋園と言ひまして、現在はありませんが、池之端仲通りにあった薬屋さんです。この店の前に石を組んだような下水が描かれています。蓋はされていないように見受けられますが、ともかくこのような下水が作られていたという事が分ると思ひます。

（松松四五）この絵は、お菓子屋さんの店先です。店の前に蓋のされた下水が描かれています。蓋は石のように見えます。江戸時代前期、寛文（一六六一—一六七二）の頃の町触れに、下水に蓋をかけるようにとか、下水の板や石垣の壊れた所は直すようにといったものがあります。ですから下水の蓋は石だけでなく、板のものもあつたと思われれます。

（松松四八）藪小路というのは、虎の門の交差点から神谷町の方に行くと、愛后の方に抜ける通りがあります。その通りを藪小路と呼んでいたようです。

武家屋敷のある所ですが、角の家に藪があつたので、そのように呼んでいたと言われています。ここでも石組の下水があり、橋も石で架けられています。大きい丸印の所に文字がありますが、桜川と書かれ

ているようですが、記録によると桜川という川は確かにありました。この川が下水の役割を果たしていたわけです。上の丸印の所ですが、下水の脇に尖った石が並べられています。この石はどのような役割を果たしていたのか。転落防止用の、今流に言えば防護柵のようなものではないかと思えます。「御府内備考」によると桜川の上流は、四ッ谷の蛟河橋辺り。あの辺りから現在の迎賓館を抜け、赤坂に出、溜め池の辺りから愛后の方に出て来るというような流れだったらしいですね。

(図一) この地図は先程の絵六と関連します。左の方に紀伊殿と書かれています。これが現在の迎賓館の位置に当たります。丸印の所に「此大下水口口落合溜池より下を楓川と唱え、芝宇田川橋を経海に入る也」と書かれているのが読めます。一部判読出来ないのですが、これは江戸切絵図のうち赤坂今井辺図の部分です。切絵図の中にも大下水という言葉があったので、御紹介しました。

(絵七) これは四ッ谷の蛟河橋の絵です。蛟ヶ橋と言っていますが、JRが信濃町に向かつて行くとトンネルを出た直ぐの辺り、南元町と言いますが、その辺りに蛟ヶ橋という橋が架かっていたようです。この絵では河の真真中に杭が並んでいます。これはゴミでもよけるために作ったものでしょう。

蛟河も下水を集める役割を果たしていたのですが、この川の脇に小さい下水が描かれています。大きい川は、石積みですが、小さい方は丸木と板で柵を作ったようになっています。左の丸印の部分は、多分水溜め桶でしょう。ここで洗濯をしているのでしょうかね。「御府内備考」では蛟ヶ橋の大溝は幅五尺とあります。

(図二) この絵は切絵図のうち小石川辺の図です。丸印の部分に「コノナガレ小石川大下水ト云」と書いてあります。水戸殿というのは現在の後楽園で、文字の辺りがドーム球場辺りになります。この川は、上流が豊島区の長崎辺りで、板橋から大塚を通過して小石川に出て来ます。俗に千川という言葉方もしていたようです。千川上水とは別です。丸印の少し上流には町屋がありますが、下流は水戸様のお屋敷から直ぐに神田川に落ちます。だからこの辺ではかなり下水化されていたものと思われれます。この流れの跡は、公共下水道の「千川幹線」になっています。

(絵八) この絵は市ヶ谷の八幡神社。市ヶ谷駅のお堀の反対側の山の上に現在も八幡神社があります。その辺りの絵です。丸印の所に小さい川のようなものがあります。「御府内備考」によると、これはかなり大きい下水だったようです。幅が六尺、

両側が石垣であったそうです。この跡は現在は『市ヶ谷幹線』になっています。上流は大久保辺りの下水と四ッ谷大木戸の上水の余水が流れ込み、飯田橋近辺にあった船河原橋から、ちようど文京区と新宿区の境ですが、神田川に落ちていました。

(松橋九) この絵は、上野公園の入口に当たる所で、左下に不忍池が描かれています。池から流れ出た川は忍川と呼ばれ、広小路を横切って三味線堀から鳥越、蔵前を通って隅田川に落ちていました。三つの橋が架かっていますので、三橋と言われています。中央の橋は、将軍が寛永寺を参詣される時に通られる橋だそうです。『上野町沽券図』を見ますと、この忍川のところは『公儀下水』となっています。幅は一丈九寸。川が下水道の役割を果たしていたと思われます。

(松橋四) この図は切絵図の本所の部分です。『北本所中ノ郷石原辺図』と言います。丸印の左側の大きい下水が『南割下水』、右側が『北割下水』です。北割下水は、現在の春日通りに当たります。南割下水は、現在の江戸東京博物館の建設予定地から錦糸町の駅に向かう少し大きい通りであったようです。以前川柳と下水の話の際申し上げましたが、割下水というのは俗称地名にも使われていました。例えば一茶の句に『鶯が呑むぞ浴びるぞ割下水』

川柳に『黙礼の中を流るる割下水』等があります。幅は二間。万治二年(一六五九年)本所に屋敷地を造る時に掘られたものだそうです。明治の末頃に撮影された写真によると、割下水は丸太と板で柵のようにして作られていました。周辺に工場が立並ぶようになるまでは大変きれいな水が流れていたようです。

(松橋十一) この絵は、新堀川。現在の合羽橋の商店街です。明歴(一六五五)五七年以降に掘られた川で、幅はおよそ二間半余り。現在の台東区竜泉辺りから台東区のほぼ真中を南に流れ、蔵前で東に曲り、隅田川に落ちていました。今は大部分が『浅草幹線』になっています。上流は三の輪の方です。石神井川から分かれた音無川が三の輪の方まで来て、その水もこの川に落ちていたようです。

右の丸印の所、道路の真ん中に筋が描かれています。これが何かは『御府内備考』を見ても出て来ません。どうも下水としか考えられないのですが、道路を横切る部分には何も描かれていません。この部分は暗渠になっていたのかもしれませんが。あるいは橋になっていたが、その上に土が被さって見えなくなっているのかもしれませんが。

今まで街の下水がどのように造られていたのか、石組の下水があつたり丸太と板で造られている下水があつたりしました。それでは商家や長屋や武家屋敷から下水までどのようにして流れていたのか。その辺りをこれから見ていきたいと思います。

(図四五) この図は、三井文庫でコピーをさせてもらった越後屋呉服店向店の屋敷図です。場所は、現在の三越本店のある辺りです。本店は現在の三井信託銀行のある所で、その向側にありました。この絵の上側、右から二つ目の丸印の所に四角の枡のようなものがあります。これは多分便所だと思えます。一番右の丸印の所に「大下水」と書かれています。幅は六尺ほどあつたようです。この丸印の左端にいてい形の図が描かれています。これは小便所のように思えます。そうであれば、まさに水洗便所ですね。それから町屋敷の中を下水が流れていたわけですが、恐らく越後屋さんが次々と周囲の土地を買つて屋敷を広げ、昔は地境だつた所も取り込んでしまつたためだろうと思ひます。

一番下の丸印の所に、丸に井と書いた部分があります。これは恐らく消防用の井戸だと思ひます。この井戸と同じようなものが先程の便所の左下にもあります。

右側中央に三つの丸印がくつついてあります。

この真中の丸印の所に「下流し」、その下に「上流し」と書かれています。多分台所でしょう。上の丸には「井戸」とあります。この井戸は多分掘り抜き井戸だと思ひます。

左上の大きい丸印には「大下水通り」とあり、その下の板のようになった所には「下水」と書かれています。その左隣の丸には「用水」とあります。店の中にも消防用の水溜桶が置かれていたものと思ひれますね。あとは「下水」と書かれた部分に丸印をつけておきました。流れの方向はよく分からないのですが、店の左側にも下水が描かれています。台所の下水は右端に溝があつて上の大下水に繋がつていたのでしよう。大下水を右に辿つて行くと現在のお堀にぶつかりますので、恐らく大下水は堀に繋がつていたと想像されます。

(図六一) この絵には長屋の下水が描かれています。路地の真中に溝板が掛かつた下水が見えますね。この絵では分かりませんが、長屋の流しから木樋や竹筒でこの下水に排水されていたようです。

(図六一) この絵は、路地を表通りから見た絵です。やはり路地の真中に溝が描かれていますね。上の丸印の部分には障子戸の陰に水瓶の上に水桶が乗つていような絵が描かれています。その

丸印の上に井桁のマークがありますが、これは奥に井戸があるという印だそうです。

（松松十一二一）この絵は、江戸名所図会のうち『霞ヶ関』という絵です。武家屋敷を描いたものです。石組の下水が造られてあり、左の丸印の中の黒い四角いものは排水口ではないか、よく見ると水が落ちてるように描かれていますね。何故このような箱が作られたのか、私の想像ですが、このようにしないと道路まで下水が飛び跳ねるためだろうと思います。左から三つ目の丸印の所に柵のようなものがあります。これはごみよけのスクリーンのようなものではないかと思えます。一番左の丸印の所に柵のようなのものが描かれています。これは下水のものか上水のものか分かりません。上水にも柵はあったようです。下水にも水溜め柵というのがあったようです。『千代田区史』によると水溜め柵をよく掃除せよというお触れが出ていたようです。ですから事によれば下水の水溜め柵かもしれません。随分沢山の水が流れているように描かれていますので、下水だけではなく、別の水源があったのでしよう。

さて、これからは下水と関係のありそうな絵を少し紹介したいと思います。

（松松十一四四）この錦絵は、『十二月の内、

卯月、初時鳥』といい、太田美術館が所蔵しているものです。初鰹を料理していますね。中央の丸印の所にある流しが面白い。初鰹を調理している側からは座り流しですが、反対側からは立ち流し。丸印の上には水瓶と水桶が描かれていますね。この高さから判断すると立ち流しですね。勝手な想像ですが、このような使われ方もあったのでしよう。

（松松十一五五）この絵は『従夫以来記』（それからいらいき）という戯作本に載っていた挿絵です。据風呂の絵ですね。据風呂というのは移動可能で、どこにでも据えられるわけです。風呂の初めは蒸し風呂とか岩風呂のように室の中に入るもので固定式です。据風呂は、現在の家庭にある風呂のように桶の下で火をたいてお湯を沸かして入る。風呂桶の下の丸印を見て下さい。車が付いていますね。『以来記』というのは、『未来記』という意味らしい。銭湯で浄瑠璃や謡をうなっている人が多いので、この絵のようにすれば商売になるぞという事のようにです。風呂屋の出前ですね。

（松松十一七八）この絵は、江戸名所図絵のうち『板橋駅』の図です。右の丸印、洗濯をしています。現在の石神井川です。よく見るとちよつとした台の上から直接川に洗濯物を漬けてすすいでいるようです。左の丸は車井戸。普通なら井戸端で洗濯を

する図が描かれるのでしようが、この井戸は街道筋にあるからでしようか。長屋の中の井戸とは違うのでしよう。

(松松一十七) この錦絵は、国芳の『松阪屋呉服店ノ前、正月の賑い』という絵です。屋根の雨水を樋がどのように受けて下に流すのか、よく描かれています。錦絵で雨樋が描かれているものはあまりありません。大変珍しい絵だと思います。この絵は、三枚続きですが、その内の二枚です。

(松松一十八) この絵は、樋竹売りの絵です。手元の黒いものは鋸で、長さの注文に応じたようです。左の文字の意味は『この竹は八月に切ったもので、虫の害がない良い竹だ』ということのようです。おそらくそんな事を言いながら売り歩いていたのでしよう。なお、この絵は、『今様職人尽歌合』の内の一枚です。

川柳にも次のようなものがあります。

一本を片身づつ売る樋竹屋

跡先へ心をつかう樋竹屋

裏店を樋竹売の跡じさり

大きい家では銅製のものもあつたようです。また板をV型に打ち付けたものもありました。でも一般には竹を二つに割つたものようですね。

(松松一十九) この絵は、『江戸名所図屏風』

の一部です。天水桶が商家の屋根の上に乗っている所が描かれています。

(松松一十) これは、江戸名所図会の内の『今川橋』の絵です。今川橋というのは現在の神田駅の近く、中央通りの中央区と千代田区の境の所にあつた橋です。近所には瀬戸物屋さんが多かつたようですが、丸印の所に水溜め桶が並べられています。天水桶のようにも見えますが、多分水溜め桶だと思います。

(松松一十八) これは、『鉄砲町沽券図』の一部です。道路の真中に二本線があり、上に丸印があります。ここには、『マス』と書かれています。これは上水の分水柵だと思います。その左に上水から分岐した井桁が描かれています。これは消防用の井戸でしよう。大伝馬塩町と書いてある宅地の中の井桁は、多分裏店等にあつた井戸だと思います。他の場所にも同じようなものがあります。掘り抜きではなく、上水から分水した井戸ですね。それから右上の丸には本石町大下水、左下の丸には大伝馬塩町大下水とあります。町の名が冠してあるということとは、その町が管理していたとも考えられます。

(松松一十一) この絵は、『繪本風俗往来』という本に載つていた『夏の晩、井戸端の図』という絵です。表通りから少し入つた所にあつた井

戸で、掘り抜き井戸ではなく、上水を汲み出して使うものだったと思われれます。子供は泣いているのではなく、夏の朝ですからまだ眠くて目をこすっているのでしょうか。

（松松一—十一—四） これは、江戸名所図会のうち『神田明神祭礼其二』という図です。丸印の所に消防用の井戸が描かれています。承応四年（一六五五年）に江戸の町の消防水利のため町々の両側に消防用井戸を掘るように命じた町触れが出されていたそうです。

（松松一—十一—二一） これは本所の中の郷で、江戸名所図会のうち『中之郷さらし井』の図です。駒形橋を本所の方に渡った辺りでしよう。その辺に『さらし井戸』というのがあったようです。『江戸、町づくし稿』に北本所荒井町にあったとあります。新しく井戸が出来たので新井町と言っていたようですが、誤って荒井と言うようになったと書かれています。この井戸は、掘り抜きの井戸でしよう。右の丸印を見て下さい。下水は片側が石組、反対側は丸太と板です。

（松松一—十一—四四） これは、江戸名所図会のうち『桜カ井』の図です。現在の内幸町。山下御門と幸橋の間にあったそうです。井戸側は石組、周りの下水も石組で、その下水が道路に出て来ています。

道路の端の下水も石組の立派なものです。

（松松一—十一—二五） これは『従夫以来記』の挿絵です。この挿絵には右側に立っている男の人の説明はありません。左の二人は坊さんと神主さん。二人とも窓から施しを受けています。神と仏が一緒に施しを受けているという事を揶揄したような絵です。右の人は長い柄のついた柄杓のような物を持っています。それで私は下水流しをしている人ではないかと想像しています。脇に流れているのは、石組の下水ではないかと思えます。

以上私が今まで折りに触れて調べた描かれた江戸の下水の紹介を終わります。今後も浮世絵や古い写真等にも当たって江戸の下水についていろいろな角度からアプローチしていきたいと思えます。

### 討 論

公 倉 □ 先程下水の量はそれほど多くないと言われましたが、下水の断面が大きいのは雨水排除を兼ねていたからでしょうね。

西木 田 湧水もあったでしょうね。お寺や武家屋敷は、湧き水の豊富な所に建てたようですから。

石 田 田 これらの絵の出典から時期はいつ頃でし

ようか。それからかなり石を使っています。伊勢に行つた時の記憶では、あの辺りも周囲に石組の排水路がありましたね。かなり似ているなという印象を持ちました。それから防火用水槽と水溜め桶の違いはどんなものでしょうか。

西木田 江戸名所図会は、幕末ですね。ですから江戸末期のもので。『御府内備考』には石組だったのか、作つた人は誰で誰が管理しているか、大変詳しく書かれています。神社は昔の形式を保存していますから、やはり参考になりますね。それから井戸のない所は消防用に水溜め桶を据えておけとお触れがあつたようです。一ヶ月に一度水を取り替えるというような細かい指示もあつたようです。手桶の数も間口に応じて決められていたようで、防火対策は厳密を極めたようです。用途は消防用でしょうが、道に撒いたりもしたことでしょうね。

稲垣堤場 昔の下水の位置に現在の下水管が入っていると云われますが、検証してみられましたか。

西木田 おおむねそのようです。もつとも全部を検証したわけではありません。旧市内の幹線下水道は、だいたい昔の川の跡にあります。大正時代から昭和にかけて速成下水というのがありました。これなどは川を下水化していったものようですね。単に蓋をしたのではなくて、川筋に下水を作つてい

つたようです。

稲垣堤場 東京の下水道は、神田下水に発祥するのではなく、江戸開府以来の歴史があるわけですね。このような点、広く広報してもらいたいものですね。公口 地形が随分変わりましたが、地名に名残が残っていますね。地名を訪ねると、地形が想像出来る。この点も注意したいものです。

稲垣堤場 下水の跡も昔の地形を復元するのに役立ちますね。一度『江戸の下水を歩く』という企画を実現したいですね。

工口井 栗田さんの集められた絵を見て気がついたので、溝に蓋をする時期があるわけですが、西洋建築が入つて来ると、溝に蓋をする絵がなくなっています。多分暗渠化して埋めて行くのだと思うのです。例えば築地ホテル館というような錦絵を見ると、大きい建物なのに下水等は描かれていない。明治初期に作つて間もなく焼失したわけですが、完全に暗渠化されていたのではないかと想像されます。明治中期に建てられた岩崎邸も暗渠化されています。どうしてそうなったのか、これらの絵を見ながらそんなことを考えていました。

西木田 絵は、画家が不必要と思えば描かなくてよいわけです。だから画家が下水を描くか、描かないか、そこに違いがありますね。銀座の煉瓦街の

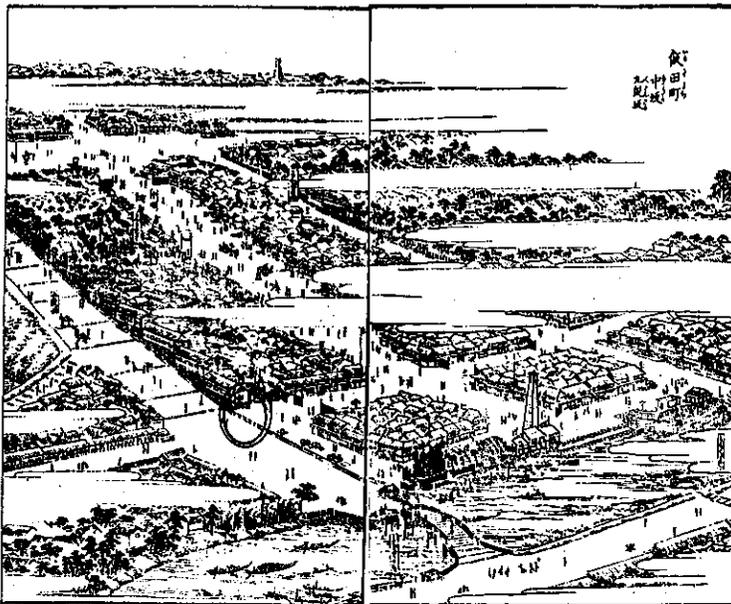
絵も溝らしきものが描かれたのとそうでないのがあります。写真には溝の蓋のようなものが写っていますが、歩道と車道の境界石のような気もします。

**稲相場** 絵の意味を判断するのは難しい面もありますね。例えば絵二十五は、下水浚えではなく、道路に水を撒いているようにも思えます。舗装もされていませんからほこりが立つたでしようから。

**公口** しかし江戸時代には溝浚えのお触れは随分出ていますよ。月に三度浚うこと、ごみを捨てぬこと、等厳しいものだったようですから、この絵はやはり下水浚えと解釈してもよいでしょう。

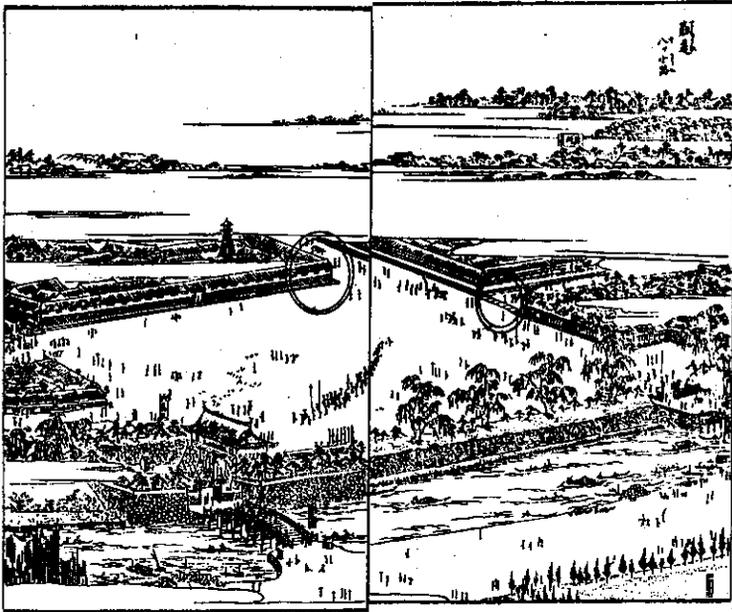
**稲相場** 水が気候に及ぼす影響について書かれた本もあるようです。昔の人は随分多面的に考えていたようです。それにしても栗田さん、この収集は大変なものです。

(完)

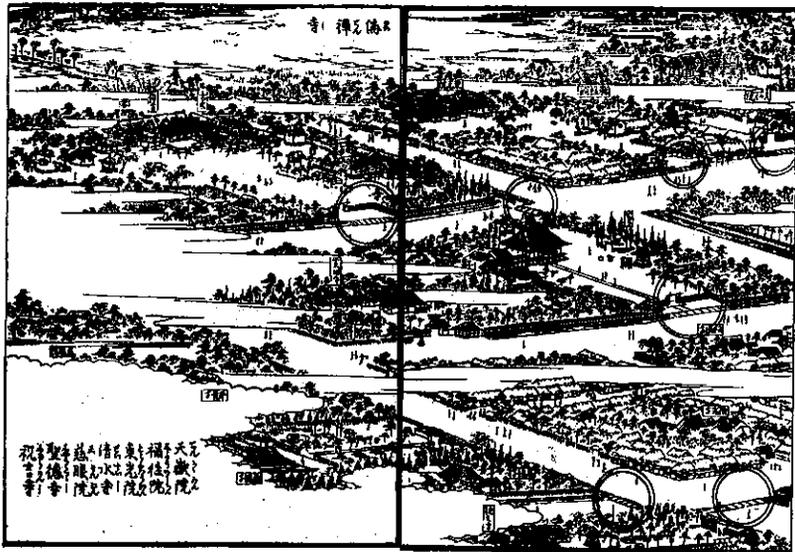


絵1 下水・下水橋 (江戸名所図会「飯田橋」)  
現・東京都千代田区九段北一丁目

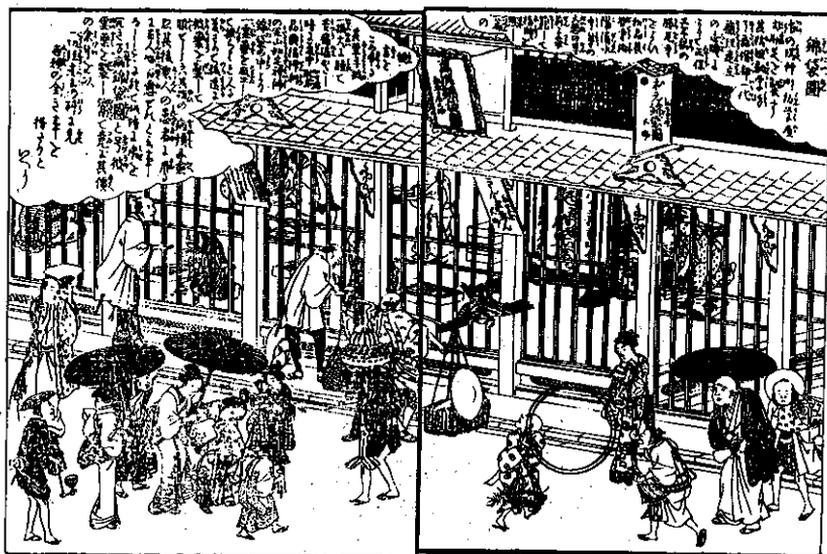




絵2 武家屋敷の構え堀・下水橋 (江戸名所図会「筋違八ッ小路」)  
現・東京都千代田区須田町一丁目



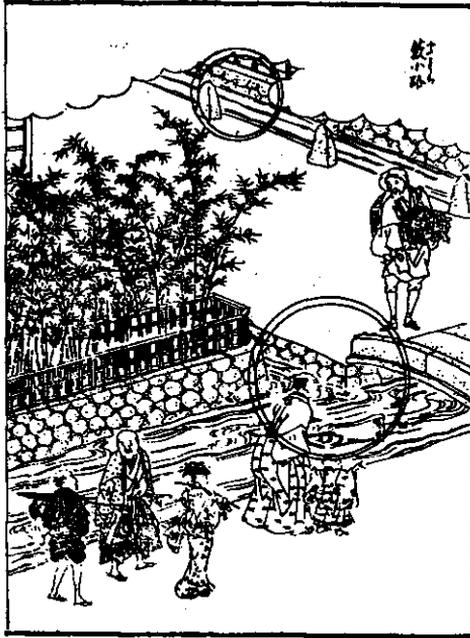
絵3 寺社地の構え堀・下水橋 (江戸名所図会「海禅寺」)  
現・東京都台東区松が谷二丁目



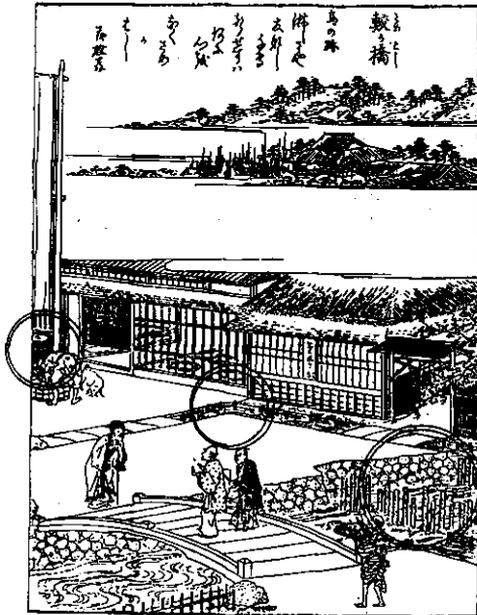
絵4 石組下水 (江戸名所図会「錦袋園」)  
現・東京都台東区上野二丁目



絵5 下水蓋 (「船橋屋」) (「江戸時代図誌」筑摩書房より)  
現・東京都江東区佐賀一・二丁目



絵6 石積み下水「桜川」(江戸名所図会「藪小路」)  
現・東京都港区虎の門一丁目

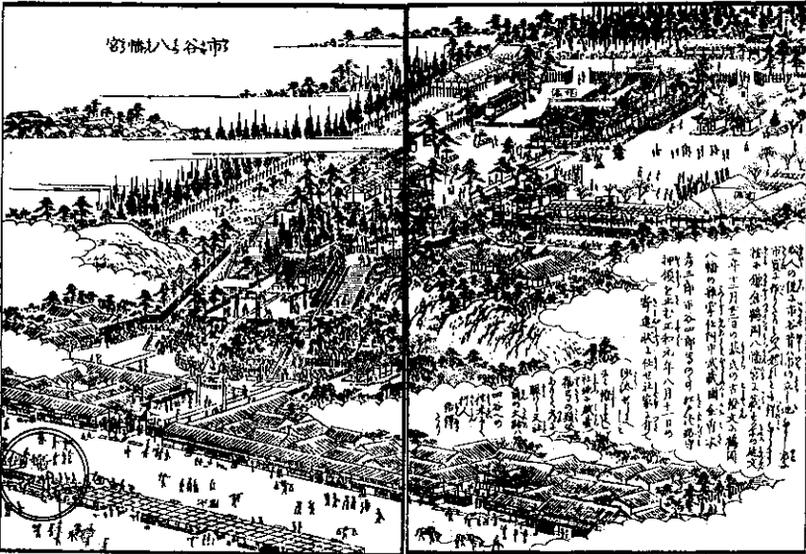


絵7 石積み下水・ゴミ除け杭・木組み下水(江戸名所図会「鯉ヶ橋」)  
現・東京都新宿区南元町

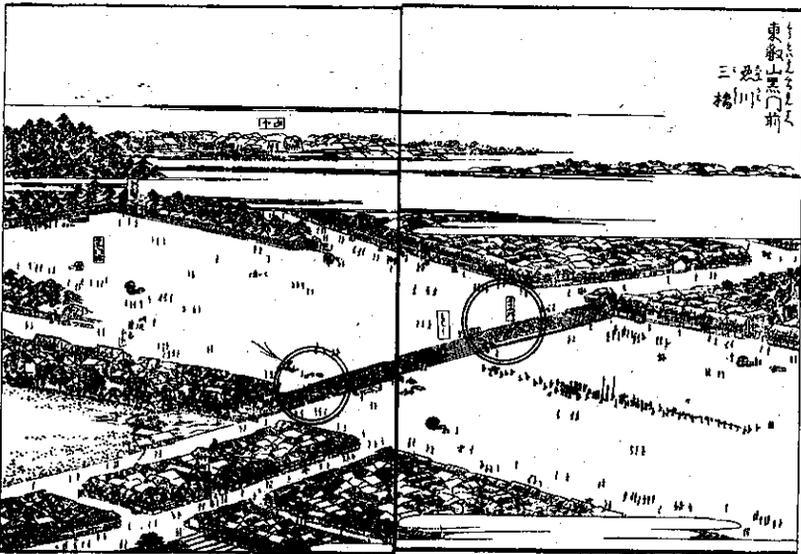


図2 赤坂の下水道（江戸切絵図「赤坂今井辺図」）  
現・赤坂見附～溜池辺





絵8 市ヶ谷大下水 (江戸名所図会「市ヶ谷八幡宮」)  
現・東京都新宿区市ヶ谷八幡町



絵9 忍川 (公儀下水) (江戸名所図会「東叡山黒門前」)  
現・東京都台東区上野二・四丁目

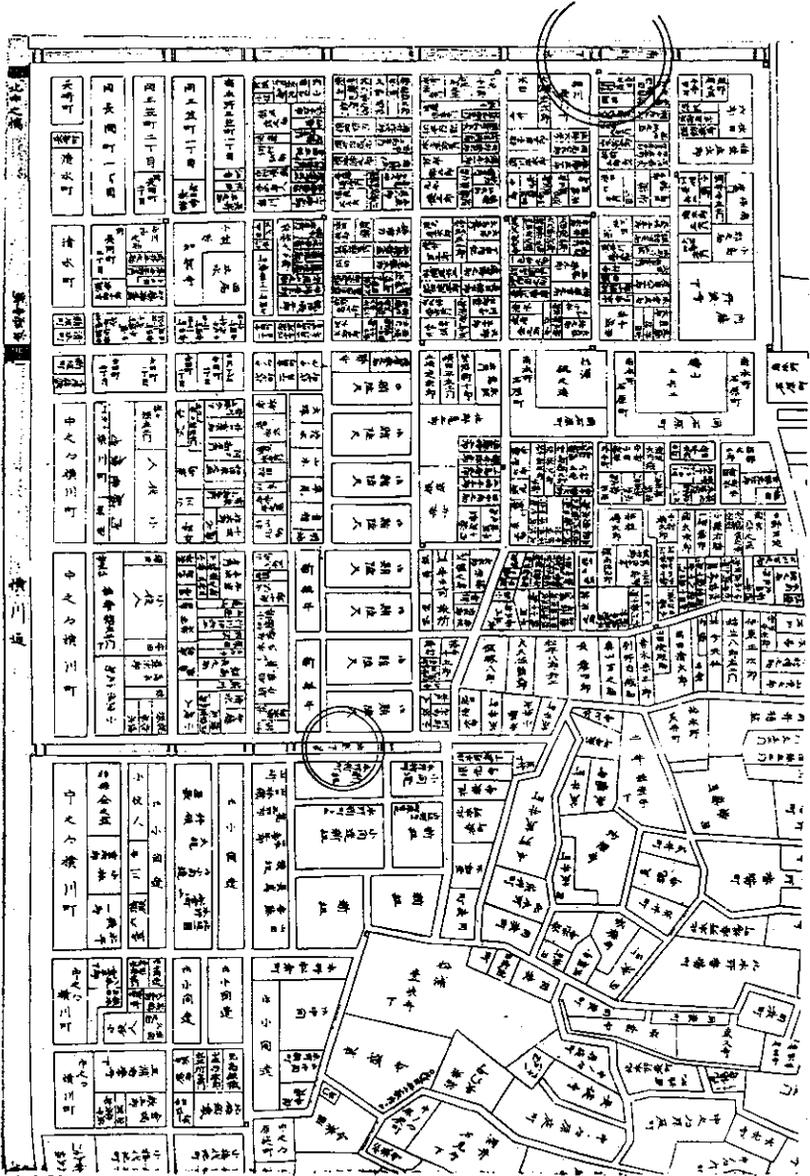
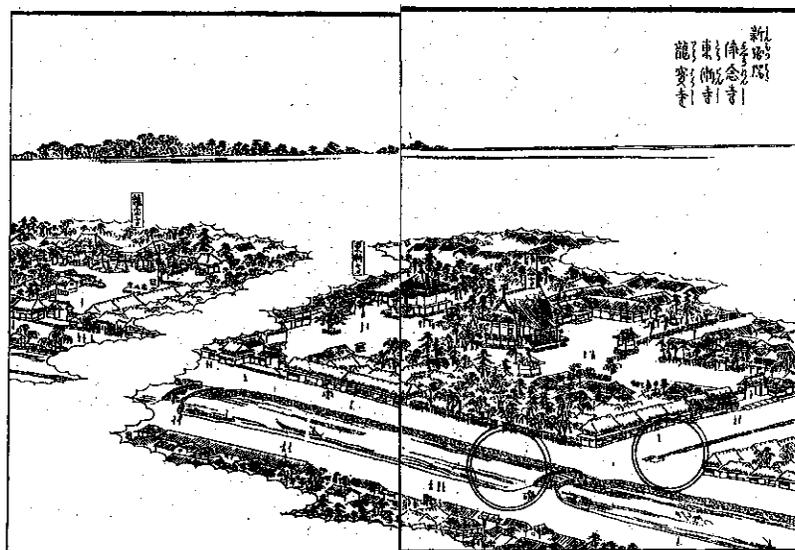


図4 本所割下水 (江戸切絵図「北本所中の郷石原辺図」部分)  
現・東京都墨田区本所・石原・亀沢の一～四丁目



絵10 新堀川 (江戸名所図会「新堀端」)  
現・東京都台東区蔵前四丁目

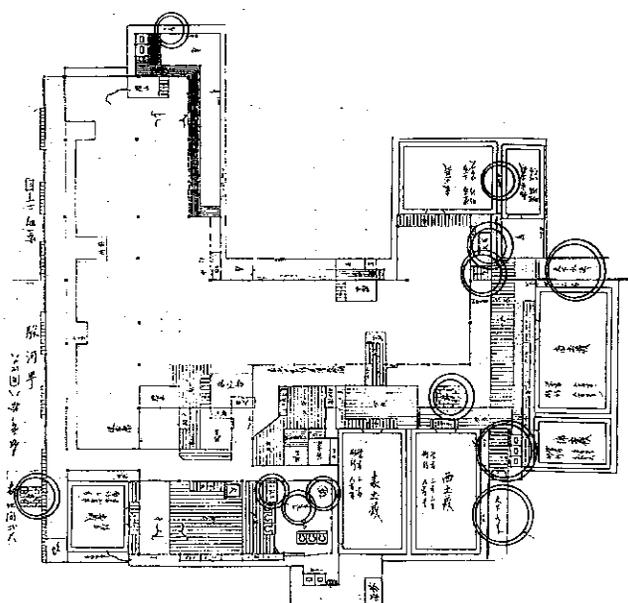


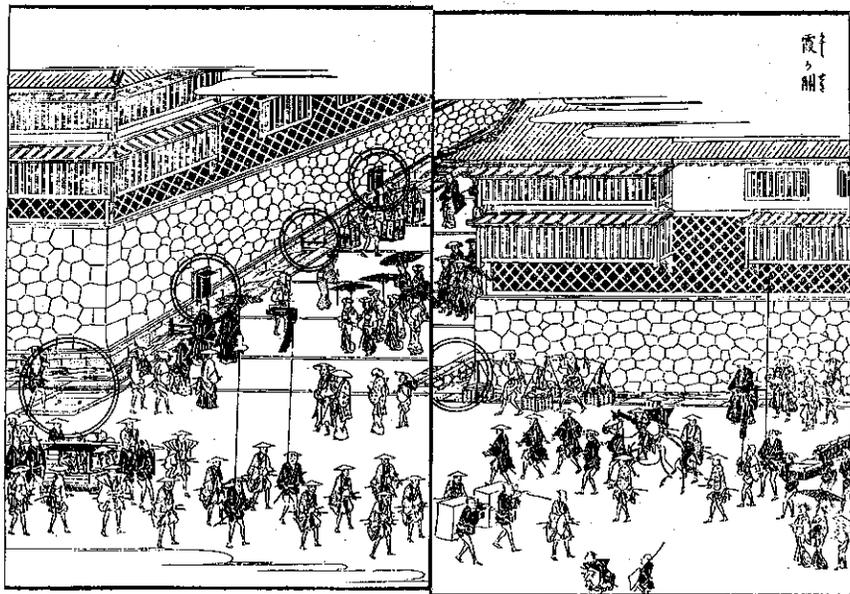
図5 下水・井戸・便所 (江戸向店仮屋敷絵図面 (越後屋呉服店))  
現・東京都中央区日本橋室町一丁目 (三越本店)



絵11 長屋の下水(1) (浮世床の挿画 (式亭三馬))



絵12 長屋の下水(2) (同前)



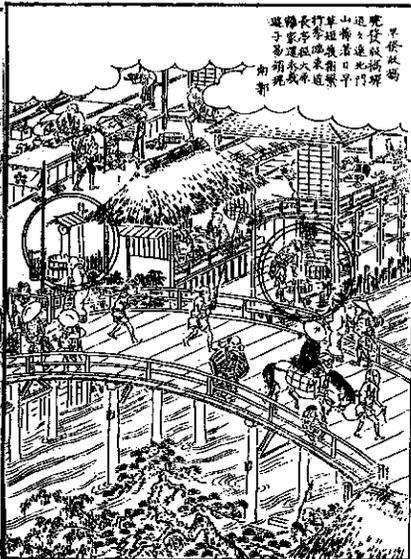
絵13 石組み下水・排水口・ゴミ除け柵 (江戸名所図会「霞ヶ関」)  
現・東京都千代田区霞ヶ関



絵14 流し台 (錦絵「十二月の内・卯月・初時鳥」)  
(太田美術館「江戸の一年」より)



絵15 据風呂の戯画（『従夫以来記』挿絵・喜多川歌麿画）



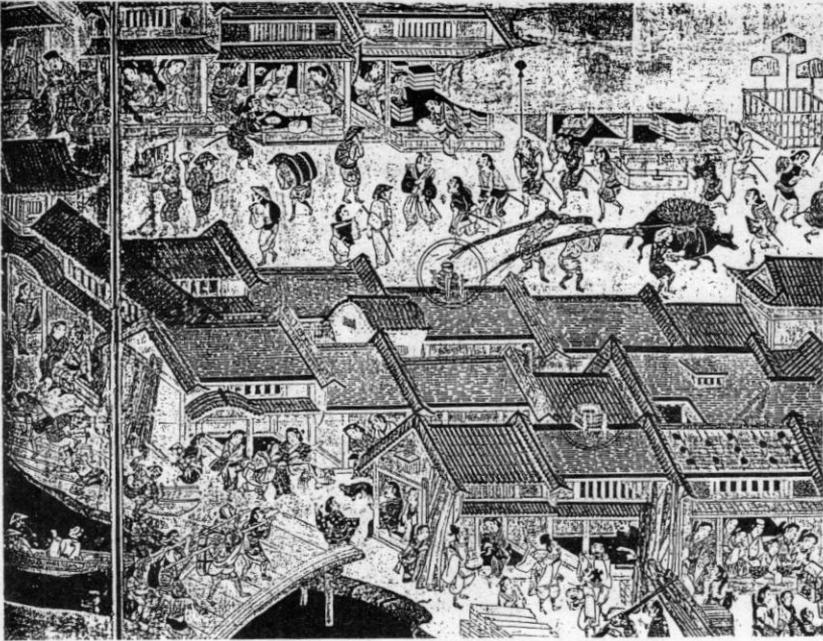
絵16 洗濯場・車井戸（江戸名所図会「板橋駅」  
現・東京都板橋区仲宿・本町）



絵17 雨樋 (錦絵『松坂屋呉服店ノ前・正月の賑い』国芳画)  
(筑摩書房「江戸時代図誌」より)



絵18 樋竹売り (『今様職人尽歌合』)



絵19 天水桶（『江戸名所図屏風』（部分）  
（筑摩書房『江戸時代図誌』より）



絵20 水溜桶（江戸名所図会『今川橋』）  
現・東京都千代田区鍛冶町一丁目、中央区日本橋室町四丁目境（中央通り）

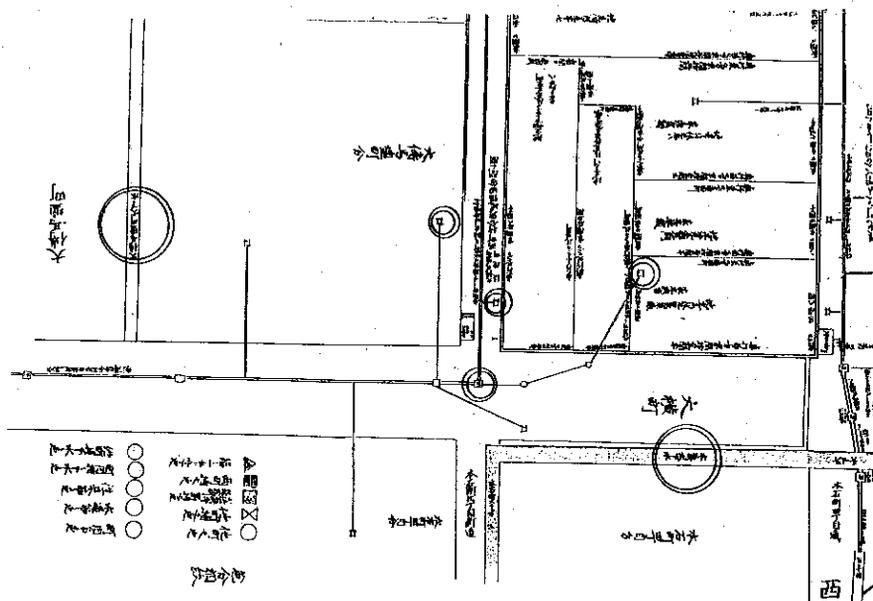
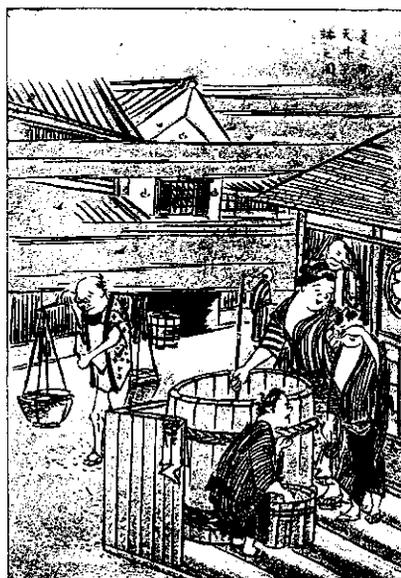
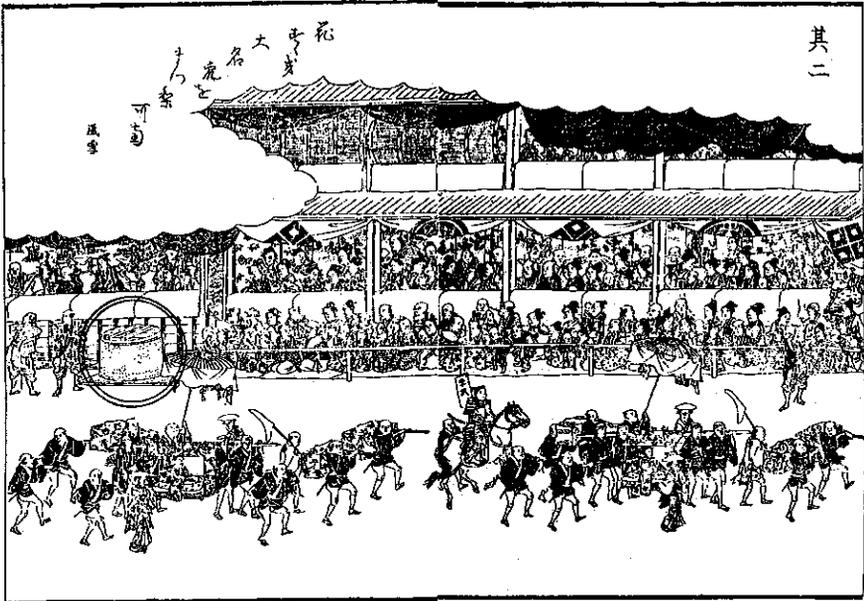


図6 消防用井戸・裏店井戸（「鉄砲町沽券図」）  
 現・東京都中央区日本橋本町三丁目



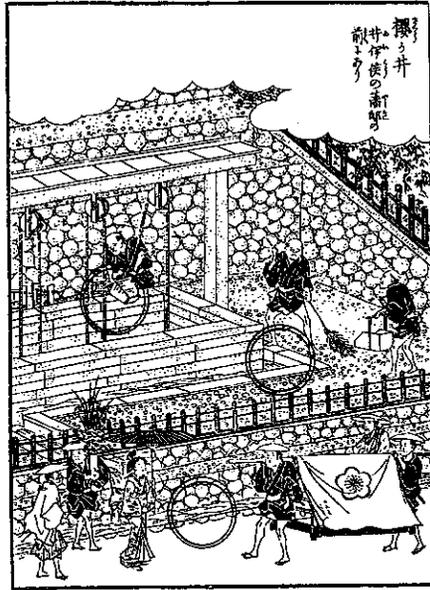
絵21 井戸（「夏の暁・井戸端之図」）（絵本風俗往来）



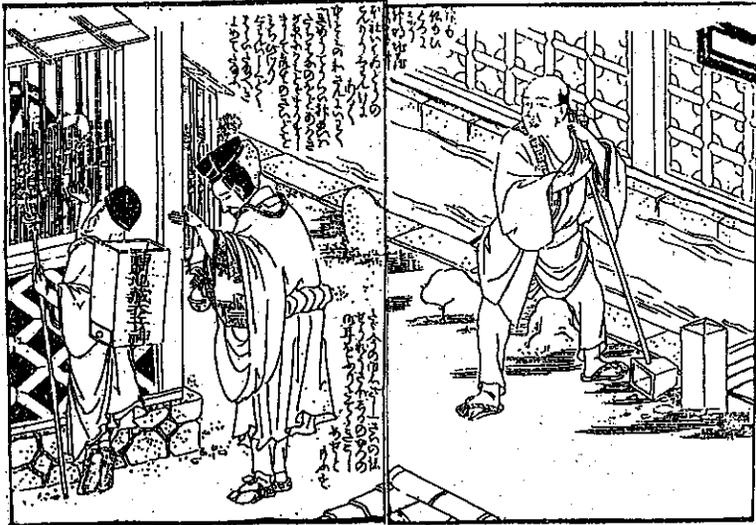
絵22 消防用井戸 (江戸名所図会「神田明神祭礼・其二」)



絵23 堀抜井戸・下水 (江戸名所図会「中之郷さらし井」)  
現・東京都墨田区東駒形一丁目、鹿橋一・二丁目



絵24 井戸・石組み下水 (江戸名所図会「桜力井」)  
現・東京都千代田区内幸町一丁目



絵25 下水浚い (『従夫以来記』挿絵)